

京都市立小学校における「さんさん付け」呼称の導入実態

杉井 潤子・林 逸歩

(京都教育大学家政科・京都教育大学教育学部家庭領域専攻平成 27 年度卒業生)

An Investigation of Teacher's naming to His/Her Pupil in Kyoto City Elementary School

Junko SUGII, Itsuho HAYASHI

2017年11月30日受理

抄録：本研究では、教育現場での教師から児童への呼びかけに着目し、京都市立小学校における「さんさん付け」呼称の導入実態を明らかにした。調査の結果、京都市立小学校全 166 校のうち、回答があった 98 校の 70.4%にあたる、69 校の学校で部分的もしくは学校全体で「さんさん付け」呼称が導入されていることが明らかになった。「さんさん付け」呼称について、後に続く言葉遣いが優しくなる、ひとりひとりを同じように大切にすることができるなど、人権の視点から導入されるケースや、授業中を公式な場面として位置づけるという意図をもって導入されている学校が増加傾向にあることも明らかになった。

キーワード：呼称、さんさん付け、京都市立小学校

I. 研究の背景と目的

1. 呼称から見える人間関係への着目

わたしたちは、見ず知らずの人が会話をしているのを聞いていたとしても、その会話の中で用いられる呼称や敬語などから、会話をしている当事者の人間関係や上下関係を推測することができる。呼称や敬語、話し方、言葉遣いなど、わたしたちが会話の当事者の関係性に気づくための項目は多く存在している。とくに「呼称」は、日本語社会において、単語レベルの表現形式の選択という点で、狭義の敬語と並び、言語使用と社会的対人関係が非常にセンシティブになる」と指摘されている（尾崎，1998）。尾崎によれば、「相手との関係を考慮してどの呼称を選ぶかは、日本語社会に暮らす者にとって日々選択を迫られる問題である。また、そこで使われた呼称は、当事者間の対人関係を、肯定的方向へ、あるいは否定的方向へと大きく変える力を持っている」とも述べられており、呼称とは人間関係に大きな変化をもたらしうる言語ツールであることがわかる。

それでは、わたしたちが誰かに話しかけるとき、また、さまざまな場面で相手を呼ぶとき、その呼称をどのように選択し、どのようなルールで使用しているのでしょうか。

かつて鈴木（1973）は、親族名称や地位名称など、相手を示すことばの総称を「対称詞」と定義づけ、この対称詞が持つ規則性を基本的に支えているのは、目上（上位者）と目下（下位者）という対立概念であると述べている。右図は、鈴木 の著書のなかで、ある 40 歳の小学校の先生が、ある状況下で誰のことをどう呼び、相手からどう呼ばれているのかを示している例である。図中に用いられている対称詞には、「あなた」「おまえ」「きみ」といった代名詞の他にも、

[illegible]

図1 鈴木孝夫『ことばと文化』1973 p.148

「名前」「おじいさん」「おとうさん」「にいさん」「先生」「ぼうや」などがある。つまり、この例を一般化すると、話し手は、目上の人に対して、人称代名詞を用いることはできず、親族名称（おとうさん・にいさん、など）や役職名称（お医者さん・先生など）を用いて呼んでいるが、目下の人に対しては人称代名詞で呼びかけたり、言及することができるということである。自身よりも目上の人への呼称は、ある程度の制限がかかるが、目下の人への呼称は、目上の人に対する呼称に比べると、選択肢が多いと言うことができる。それは家族内での呼称にとどまらず、学校や地域社会、職場でも同様のことが言える。

2. 教育現場で用いられる呼称に関する先行研究の検討

それでは、教育現場で用いられている呼称は、どのように選択されているのであろうか。

先行研究をみていくと、教員間の呼称のほか、教員から児童生徒への呼称、児童生徒同士の呼称、小中高校などの校種による違い、さらに児童や生徒がどのように受け止めているのかという研究などがある。

学級内における児童の呼ばれ方と児童相互の関係に関する研究（三島, 2003）では、小学校3～6年生を対象に、学級内で男子児童が「くん付け」で呼ばれることや女子児童が「さん付け」でよばれる場合のその児童の学級内での相対的立場の強さを検証している。小学校・中学校の校種と、学習（教室）と遊びの場面別の呼称を検証した研究（中條ほか, 1989）では、「小学生は呼びかけに使う言葉について特別の指導を受けない状態では、自ら場面をわきまえて言葉の切り替えや選択を行うほどの社会性はまだ身につけていない」という結果から、とくに小学校では学級の性格や教師の指導といった要素の働きが考えられるという。

同じく、小学校4～6年を対象に、児童は教師に何と呼ばれたいと思っているのかを探った研究では、「教師は、児童との関係や、そのときに状況などによって児童に用いる対称詞を選択しており、…意識的にしろ無意識的にしろ、その選択は教師の側に迫られる」とし、児童が教師に呼んでほしい呼び方は、「姓さん」「ニックネーム」がともに高い割合を占めることを明らかにしている。さらに「教師が便宜的に何気なく使い分けたのかもしれない呼び方を、児童は敏感に感じ取っている。…どのような呼び方で呼ぶにしろ、何かしら明確な基準が必要なのかもしれない。児童との信頼関係や児童理解をもとに、児童との関係を肯定的に保つような対称詞を選択する必要がある」と指摘している（今永, 2007）。この指摘は、榊原（2012）が「多くの呼称は消極的ではあっても、相手の同意や了解があって初めて成立するのに対して、教育関係においては教師がほぼ一方的に決めており、子どもがそれをどう受け止めているかは問われない」とし、教育現場で用いられる教員－児童間の呼称が、他の場面で用いられる呼称とは違った特殊性を持つことを示唆していることに通じる。

さらに実践研究では、小学校4年生を対象として、呼称統一を行っている学級とそうでない学級を比較し、児童同士の呼称について児童自身がどのようにとらえているかを分析した研究がある（小山, 2014）。それによると、呼称自由学級と統一学級のどちらでも、「下の名前＋さん」で呼ばれている多くの児童は肯定的感情を有し、「さん付け」という呼称指導は児童の間に「やさしく」「丁寧な」人間関係を構築するために有効である可能性が見出されている。

以上をふまえると、尾崎（1998）がいうように、「教師と生徒という立場の違い・距離のある関係を確認・維持・強化するために生徒をクン付けやサン付けで呼ぶか、それとも生徒たちと友達同士のような親密な関係を築くために呼び捨てや愛称で呼ぶかは、現場の教師にとって時には悩ましい問題」であり、とくに小学校において教師が児童に対してどのような呼称を用いるかは重要な課題であるといえる。

3. 京都市立小学校における「さんさん付け」呼称の導入の背景と研究目的

平成10（1998）年9月1日の京都新聞に、『男女混合名簿の効果と課題』という記事がある。男女平等教育の観点から、男女混合名簿の取り組みを支援するため、京都市内の小学校3校と中学校2校において、効果や課題

の調査を行うというものであった。導入当時にあがっていた声として、教員からの「さんと君を間違っって呼びそうになる」という意見が記載されている。当時、男女混合名簿を取り入れていた小学校は、京都市内 181 校のうち、27 校であると記載されており、全体の 15%にも満たないが、上記の意見からは、当時は男子が「くん」、女子が「さん」で呼ばれることが当たり前であると認識されていたことがわかる。

その後、混合名簿の導入に加えて、男女ともに「姓+さん」で呼び合う「さんさん付け」という取り組みが始まっている。どのような経緯で一斉に始められたのかどうかは調べても、なお不明である。京都市立小学校のある先生にお尋ねしたところ、「平成 17 年頃に他校の研究授業を見に行った際に「さんさん付け」がされているのを見たことがきっかけであり、それを良いな、と感じたという。その後、1 年生の担任になった時、「さんさん付け」の取り組みを始めてみたが、当初は保護者から「気持ち悪い」「違和感がある」という声が上がったとされる。「一人ひとりを同じように大切にしたい」という意図があり、「男女平等だから〇〇さん、と統一して言っているわけではない」ということが当時はなかなか理解されなかったという。しかし、そのうち、「さん付け」で良かった、という声が聞かれるようになったとも話されていた。ただ先生方のさまざまな考え方があって、「みんなが「さんさん付け」呼称を良しとしているわけではなく、また、「くん」で呼んでいるからその子のことを大切にしていなくてもいい。しかし、調査されたことはないが、「さんさん付け」は今、増える傾向にあるのではないか」とも話された。

そこで、本研究では、まず、感覚的に「増える傾向にあるのではないか」とされている「さんさん付け」呼称の取り組みが、現在、京都市立小学校においてどの程度広がりを見せているのか、また、その取り組みはいつごろから始まったのかを、京都市立小学校全 166 校へのアンケート調査をもとに明らかにすることとしたい。さらに、実際に「さんさん付け」呼称が導入されている小学校の教員にインタビュー調査を実施することで、「さんさん付け」呼称がもたらす変化や効果、実感されていることなどを明らかにし、人権とジェンダーの視点から「さんさん付け」呼称について考察することとする。

Ⅱ．研究方法と調査の手続き

本調査研究で明らかにするのは、以下の 2 点である。第 1 に京都市立小学校において「さんさん付け」呼称の導入実態を全数調査から明らかにすることである。第 2 に「さんさん付け」の導入校において、その取り組みがいつ頃から始まったものであるのかを明らかにし、人権とジェンダーの視点をふまえ、「さんさん付け」の取り組みが広がるに至ったきっかけを明らかにすることである。

1. 京都市立小学校へのアンケート調査の方法と手続き

調査は、2015 年 12 月から 2016 年 1 月に、京都市教育委員会の同意を得たうえで、往復ハガキを使用した郵送留め置き法による質問紙調査で行った。学校名を記入していただき、選択肢は「1. 男女ともに「〇〇さん」という呼び方で統一している」「2. 男子は「〇〇くん」女子は「〇〇さん」という呼び方で統一している」「3. 学校全体で決めている呼び方はない」「4. その他」を設定した。1 を選択された方には、その取り組みがいつ頃始まったものであるのかについても追加で問うた。なお、「さんさん付け」という言葉が京都市内の小学校において共通の認識として周知されているか不明であったため、質問項目では、「さんさん付け」という表記はしないこととした。

本アンケート調査をするにあたり、倫理上の配慮に関しては、「得られた結果は、本研究にのみ使用すること」、「学校名や個人名がわかるような記載方法は決してとらないこと」、以上 2 点を約束の上、調査にご協力いただくこととし、京都市教育委員会、校長会の了承をいただいた。回答は 98 校から返信をいただき、回収率は 59.0% である。

2. 「さんさん付け」呼称導入校へのインタビュー調査の方法と手続き

「さんさん付け」呼称が導入される一方で、必ずしも「さん」で呼ぶ必要があるのかどうかについても明確な根拠はなく、否定的な考えを持つ教員がいることも確かである。そこで、実際に「さんさん付け」呼称が導入されている小学校の教員を対象としたインタビュー調査を通して、「さんさん付け」呼称の導入がもたらした変化や効果、実感されていることなどを明らかにする。

(1) 調査の手続き

インタビュー調査は、2015年11月25日・27日、12月2日の3日間、「さんさん付け」呼称を平成22年度より導入している京都市立A小学校の教員を対象に、放課後の時間を使って実施した。1人につき、10分から15分の時間をお取りいただき、構造化面接をおこなった。記録は筆記形式である。なお、調査にあたり、京都市立A小学校の校長先生に許可をいただいた。

(2) 質問項目

質問項目は、教員経験年数ならびに京都市立A小学校に赴任されてからの年数に加えて、以下の7項目である。教員がそれぞれ、児童呼称についてどのような考えを持っていたのか(視点1)を問1と問2で明らかにし、実施校への赴任に伴い、「さんさん付け」呼称の導入前後でどのような心境の変化があったのか(視点2)を問3・問4で、また「さんさん付け」呼称への評価(視点3)を明らかにするために問5・問6を設定した。最後に、「さんさん付け」呼称を通して、児童呼称に対する考えに変化があったのかを明らかにするために、問7を設定することとした。

問1 「京都市立A小学校への赴任前は児童をどう呼んでいましたか(授業中・休み時間・保護者との電話対応時・参観日・部活動指導時・叱る場面の6場面を想定してお聞かせください)」

問2 「さんさん付けの取り組みがされる前、もしくは前任校で児童の呼び方について意識し、注意を払っていましたか」

問3 「赴任されて、さんさん付けの取り組みを聞いた、知った時の印象を教えてください」

問4 「さんさん付けの取り組みをされてみて、変化や効果は感じられましたか」

問5 「さんさん付けの取り組みをする中で、それが不便に感じられる場面はありますか」

問6 「さんさん付けの取り組みがされていない学校へ転勤になったら、児童をどう呼びたいと思っておられますか」

問7 「さんさん付けの取り組みを通して、自身の中で児童への呼称選択に対する意識に変化はありましたか」

(3) 調査対象者

インタビュー調査をおこなったのは、以下の7名の教員である。

表1 インタビュー対象者一覧

	性別	教員歴	赴任歴	調査日
C先生	男性	17年	5年	11/25・11/27
D先生	女性	13年	3年	11/25
E先生	女性	8年	3年	11/27
F先生	男性	6年	3年	11/27
G先生	女性	10年	7年	11/27
H先生	女性	12年	3年	12/2
I先生	女性	17年	2年	12/2

Ⅲ. 結果および考察

1. 京都市立小学校の「さんさん付け」呼称の導入実態

まず、質問 4 項目の単純集計結果であるが、結果は図 2 に示すとおりである。学校全体で「さんさん付け」呼称が導入されているのは、回答を得た 98 校のうち、全体の 62.2%にあたる 61 校であった。

アンケート調査のハガキには、自由記述欄は設けていなかったがコメントや補足を書い
てくださった先生方が多く、そのなかでも「学
校全体で決めている呼称はない」「その他」と
回答された 8 校から以下のようなコメント
(原文のまま)が寄せられた。

「学習時間に 1 を進めている」

「基本は「～さん」「～くん」。クラスによ
っては男女共「～さん」

「ただし、「〇〇さん」と呼んでいる先生
が多い」

「敬称をつけるが、1 と 2 どちらでもよい」

「教職員によって、「さん」で統一している者や「くん」を使っている者など統一はできておりません」

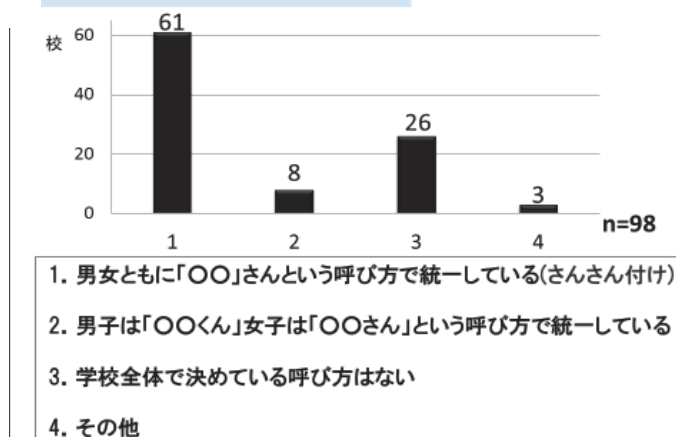
「学校全体で決めている呼び方はないが今年は各担任が男子も「さん」付けで呼ぶようにしているため、1 つ
の学年をのぞいて「さん」付けになっている」

「「さん」などの統一はしていませんが、丁寧な呼び方をするを指導しています。そのため、男なら「君」、
女の子なら「さん」という呼び方が多いですが、授業中は全員を「さん」で呼名することも多くなりました」

「基本的に男女とも「さん」で呼んでいます、「くん」「さん」にはこだわっていません」

それらの実情を考えると、61 校に 8 校を加えて、全体の 70.4%にあたる 69 校の学校で部分的もしくは学校全
体で「さんさん付け」呼称が導入されていることが明らかになった。

図2「さんさん付け」呼称導入校数



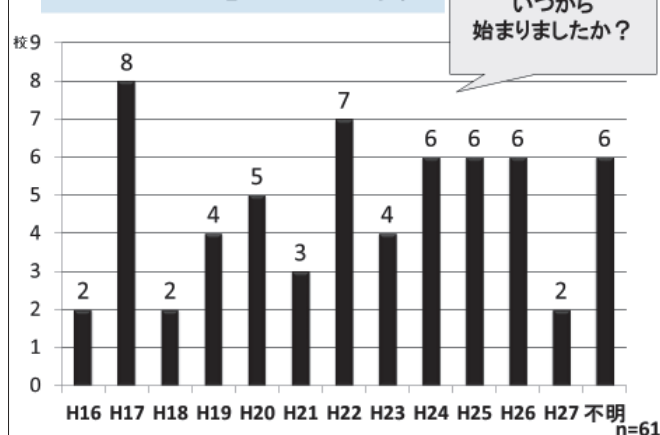
2. 京都市立小学校の「さんさん付け」呼称の導入年度

続いて、回答 1 の「男女ともに「〇〇さん」という呼び方で統一している」と回答した学校 61 校を対象に、「さん
さん付け」呼称がいつから導入されたのか、
結果を記す。

まず、「さんさん付け」呼称の導入年度がはっきりと確定していたのは 23 校であり、最も
早い導入は平成 17 年度であった。詳しい内訳
を示すと、平成 17 年度 1 校、平成 18 年度 1 校、
平成 21 年度 2 校、平成 22 年度 1 校、平成 23
年度 3 校、平成 24 年度 3 校、平成 25 年度 4 校、
平成 26 年度 6 校、平成 27 年度 2 校である。

平成 21 年度以降、毎年「さんさん付け」呼
称を導入している学校が確実に増えているこ
とがわかる。

図3「さんさん付け」呼称導入年度



次に、導入年度が曖昧で、「平成〇年頃」「〇年前には始まっていた」「〇年以上前から」「少なくとも〇年前」など、「さんさん付け」呼称は導入されているが、導入開始年度がはっきりとは確定していないと回答があった32校を合わせて計55校で、それぞれおおよその導入年度を「平成●年」「■年前に始まった」「▲年前から」「◆年前」と仮定し、集計を行った結果が図3である（「さんさん付け」呼称を導入しているが、導入開始年度は不明であると回答した6校も「不明」として含めている）。

平成16年度以降、毎年複数校において「さんさん付け」呼称の導入がされていることがわかる。とくに平成17年度が突出しているのは、「10年以上前には始まっていたと思います」「10年程前から」「約10年前」などの回答（平成27年時）を、平成17年度に導入されたものであるとして集計しているためである。また、他の導入年度未確定校の年度に関しても、数年の誤差が生じているものであると考えられるが、年々確実に増加していることが確認できる。

3. 京都市立小学校の「さんさん付け」呼称の導入実態に関する小括

以上のアンケート調査により、京都市立小学校166校のうち、98校における児童呼称の実態を明らかにすることができた。98校のうち、70.4%の学校で「さんさん付け」呼称の導入が学校全体で、または部分的に行われている。「さんさん付け」呼称の導入年度を仮定して集計している学校が32校あるため、導入年度に数年の前後は見られると考えられるものの、年々「さんさん付け」呼称を導入する学校が増加していることから、「さんさん付け」呼称は肯定的な評価がされており、多くの学校で、呼称を統一する意義が見出されていると言えるのではないだろうか。

アンケートに記入されたコメントや補足から、「さんさん付け」呼称について、4点の示唆が可能であると考えられる。まず1点目は、「さんさん付け」呼称は、呼び捨ての呼称を回避するために有効な手段であるということである。コメントに、「敬称をつけるが、1と2どちらでもよい」「呼び捨てではなく、さん・くんをつけようの段階です」という記載があり、児童の呼び方を指定することだけが目的ではなく、呼び捨てで呼ばせないことも、目的の一つとして、「さんさん付け」呼称が導入されているのではないかと考えることができる。ただし、これは、「さん付け」でも「くん付け」でも、敬称をつける呼び方であれば、どちらにも言えることである。

2点目は、「さんさん付け」呼称は、なるべく早い段階から（児童が低学年のうちに）導入しないと、浸透は難しいということである。コメントのなかに、「昨年よりの取り組みで高学年は徹底しきれていない」（平成26年度の導入校）、「子ども達の方が慣れていて、高学年でも普通に「さん」です」（平成17年度以前の導入校）というものがあり、「さんさん付け」呼称で統一するためには、子どもたちの中で「〇〇と呼ぶのが普通だ」という概念ができていく前に、呼称に慣れる機会がないと浸透しないと考えられる。

3点目は、「さんさん付け」呼称は、授業を公式な場面として位置づけるという意図をもって導入されているということである。「授業中をオフィシャルにするため、「さん」にしています」「授業中は、特別な場合を除き[さんさん付けをしている]」、「授業以外では「くん」も教員はOK」「授業の中(公の場として)意識づけている」「授業中は1ですが、休み時間や放課後などは、ちがう呼び方の場合もあります」というコメントからも、授業を公式な場面として児童に意識させるために、「さんさん付け」呼称を導入するケースがあることが明らかになった。

4点目は、「さんさん付け」呼称は、人権の観点で導入されているということである。「人権の観点や平等(力関係)にするということも含めています」「[さんさん付け呼称の導入を]学校全体で話し合って決めました。人権部が中心になって」という回答から、男女平等の考え方を推進するというよりも、個としてひとりひとりを尊重するための手段として話し合いがなされ、「さんさん付け」呼称の導入が進んでいるのではないかと考えられる。

また、他にも、「教職員意識調査アンケートを実施しています。ゆくゆくは1[さんさん付け]へと考えてのことです」というコメントを記載されていた学校があったことから、今後、「さんさん付け」呼称の導入校は、さらに増加していくのではないかと推測することができる。

4. 「さんさん付け」呼称導入校での教員の語り

インタビューの結果を、「教員は、児童呼称についてどのような考えを持っていたのか」、「「さんさん付け」呼称の導入前後でどのような心境の変化があったのか」、「「さんさん付け」呼称の評価」の3つの視点でまとめ、

教員の意識を探ることとする。なお、文脈のつながりを明確にするために、筆者が補足した箇所については[]で記載することとする。

(1) 教員は、児童呼称についてどのような考えを持っていたのか

まず、教員は児童呼称についてどのような考えを持っているのかであるが、「授業中は「くんさん」で呼ばなあかんと思って、意識して徹底的にしていた。子どもたちにもそう呼ぶように指導してたので」(C先生)、「教員になる前に、友人と[児童のことを]何て呼ぶかについて話をしたことがあって、授業中は「さん」で呼ぶって決めていた。それ以外は、くだけでもいいかなって思っていた」(E先生)、「授業中は「さん・くん」にしていた」(H先生)という回答から、授業中とそれ以外の時間との区別をつけるための一手段として呼称を位置づけていることがわかる。

また、「部活の時、エキサイトして、呼び捨てになることはあったかなと思います。[アメリカンフットボール部顧問]」(C先生)、「[子どもたちのことを]知らないうちは、丁寧に呼びたい、慣れてくると、近しく呼びたい、呼び捨てでもいいかなって思ってた」(F先生)、「周りの先生が呼び捨てしてたから、1、2年目は「[呼び捨てでも] いいのかな」って思ってたけど、あかんと言われて意識するようになった」(G先生)、「呼び捨てはしないと決めていた。一人だけ下の名で呼んでいたら周りの子の目が気になる。第三者の目を気にして[呼び捨てを] しないようにしている」(I先生)など、呼び捨ての呼称に関しては、場面によって、もしくは、親しさの表れとして用いていた、第三者の目に注意を払って、呼び捨てをしないと決めていたなど、様々であった。

また、「自身が幼いころに嫌なあだ名をつけられたことがあったから、「さん」で呼びたいなと思ってた。あと、自分の子どもの頃も「さん呼び」されてたから、それが普通、とも思ってた」(E先生)というように、自身の経験や慣れから呼称を選択したり、「高学年を担当する機会が多くて、子どもたちに「なんて呼ばれたい？」って聞いてた」(H先生)など、児童の希望を呼称に反映するケースも見られた。

(2) 「さんさん付け」呼称の導入前後でどのような心境の変化があったのか

まず、「さんさん付け」呼称導入時の印象について回答をまとめる。

「私は、[さんさん付けの導入に] 否定的で、「ええーっ！」って感じでした。その取り組みしてどうなの？っていう感覚。「くん・さん」で呼ぶことで、男女の区別がわかるっていうメリットもあったのに…と思いつつも、学校の方針やから仕方ないか、と。児童や保護者からの反応もあまりよくなくて、互いに納得していない中でのスタート。始まってからも手探りの状態で、間違っ、くんで呼んでしまうこともあったかなあ」(C先生)、「全て「さんさん」で呼ぶ必要性はないと思う。ニックネームで距離感が近づくと思うから」(D先生)、「違和感があったけど、やってみようと思いました」(F先生)、「え？っていう感じで、人を大切にするっていう意味があって「さんさん付け」してることは聞いてたけど、形だけになるような気がしてた。さんさん付けよりもっと大事なことがあるんじゃないかな？って思ってた。たとえ「さんさん付け」してても、相手をどう思うか、きつく呼んでたら[さんさん付けをしてもしなくても] 一緒やし、態度に出ても一緒やと思って」(I先生)と程度の差はあるが、否定感や抵抗感をもつ教員が半数以上を占めた。

しかし一方で、「前任校の〇〇小学校でも、「さんさん付け」をしていて、そこでは、強制ではなく、「しましょう」っていうくらいの感じ。自身は「さんさん付け」の方がいいと思っていたから、抵抗感は無かった」(E先生)、「前任校でも「さんさん付け」していた。「いいと思う」って感じやった。違和感があっても、子どもたちは意外と慣れていく。浸透していくもんやなあと思ってた」(G先生)、「「さんさん」で呼ぶ機会は初めてだったので「ん？」と思ったことはあったけど、特別、否定感があるわけでもなかった」(H先生)など、「さんさん付け」呼称を経験したことがある教員からは、肯定的な回答が得られた。

次に、「さんさん付け」呼称導入後の変化についてまとめる。

「一番変わったところは、「死ね・殺すぞ・うざい」という言葉が飛び交わなくなったところ。呼び捨てをしなくなると、後にキツイ言葉が続かなくなりました。ただ、「さんさん」でなくて「くんさん」でも、言葉遣いは丁寧になっていたかもしれないけどね」(C先生)、「「さん付け」するようになって、言葉遣いが柔らかく優しくなったかなって思う」(E先生)、「自分も子どもたちも、優しい気持ちになれる気がした。優しくなれた、ってのも含めて、丁寧な言葉かけが大切なんだと思えた。子ども同士も、丁寧なコミュニケーションができるんだなって思えた」(F先生)、「丁寧になった。「さんさん付け」の取り組みをしていないと、色んなあだ名が飛び交う

ので、いらんところで揉めなくなった。「さんさん付け」、いいと思います。大人になってからは「さん」だから。人権の意識も育つことにつながるんじゃないかなと」(G先生)、「丁寧な言葉が続くようになったし、子どもたちもきつい言葉が続かなくなった。自身も子どもたちも[さんさん付けを]すんなり受け入れていた」(H先生)、「区別をつけないための取り組みかなと思えた」(I先生)などから、言葉遣いの変化についての指摘を得ることができた。また、言葉遣いの変化として、望まないあだ名が飛び交うことを避けることができる点も挙げられており、人権の意識にもつながるという示唆を受けた。

また、「男女分け隔てなく、ってことを呼び方通して再認識できたなあと。前は、好きな色とか聞かれた時、ピンクもいいなあと考えてても、男やから「青」って言うてることがあった。けど、ええやん、ピンク好きやで、ってサラッと言えるようになった」(C先生)というように、児童呼称の変化によって、教員自身のジェンダー意識に変化があったという回答も得ることができた。

(3)「さんさん付け」呼称の評価

最後に「さんさん付け」呼称の評価であるが、これは、「さんさん付け」の取り組みをする中で、それが不便に感じられる場面はありますか(問5)、「さんさん付け」の取り組みがされていない学校へ転勤になったら、児童をどう呼びたいと思っておられますか(問6)という2つの質問項目への回答をまとめて記すこととする。

まず、「さんさん付け」呼称の不便な点については、「例えば、[部活動の時]これまで、「いけー!○○!」って呼んでいたところが「いけー!○○さん!」ってなるからね。ただ、自分自身が戸惑ってただけで、慣れると違和感はなくなりました」(C先生)、「体育の時とか不便」(D先生)、などの回答から、スポーツで盛り上がりを見せる時など、場面によっては、「さんさん付け」呼称が不便に感じられるということがわかる。

また、「先生と出会うよりも前に出会っている友人たちは、関係性がすでにできてるから、「さんで呼びなさい」とは強く言えない。公式な場面[授業中]でちゃんとしていればそれでいいのではないか」(D先生)、「不便に感じるときもある。ふとした時に○○ちゃん、ってなったり。友達同士でそう呼んでるし、その方が[距離感が]近い感じがする。あと、保護者に、「きちっとするとき以外はニックネームで呼んでやってな〜」って言われたこともある。ただ、うちの子は「名字+さん」、あの子は「○○ちゃん」ってのを気にする親もいるから…。まあ…キチキチしすぎることはないと思うけど…」(E先生)、「不便ってことはない。けど、子どもが普段呼び合っている中で、「さん」を強制してしまうことには違和感がある。普通のコミュニケーションに介入してしまう感じ」(F先生)、「どこまで縛ればいいのか分からない。授業中はマストやけど、家とか休み時間は目も届かない。それに、愛をこめて、ちゃんと呼んでいるのに、それを[「さん」]に強制するのは、はばかりれる。教員の中でも賛否両論。メリットもデメリットもあるし…。授業中だけでいいやん、ってなる先生もいるし」(G先生)などのように、呼称を統一することで、すでにできている友人同士の関係性に影響を及ぼすことがはばかりれるなど、呼称についてどこまで介入してよいのか、判断が難しいという回答を得ることができた。

また、「クラス内に同じ名字の子がいるとき。男女で同じ名字の子がいるので、今はフルネームで呼ぶようにしてる」(H先生)という回答から、「くん」と「さん」で呼ぶことで男女の区別がつくという点も指摘されている。

次に、「さんさん付け」の取り組みがされていない学校へ転勤になったら、児童をどう呼びたいと思っておられますか、という問いへの回答を記す。「[くん・さん]で[呼びたい]。学校全体で統一した取り組みをしてないと意味をなさないと思うので」(C先生)、「授業中は「さん」で呼びたい。ただ、やるなら全校でやってこそ意味があると思う」(F先生)などと、学校全体で呼称を統一しないのであれば、「さんさん付け」呼称を用いることには消極的であるという回答が得られたがそれと同時に、「その学校で奨励されているなら、「さんさん」で呼びます。もし、「さんさん」が統一されていない学校に赴任して、機会があったら、「さんさん付け」を提案してみたいとも思います」(C先生)、「郷にいては郷に従え、やと思っている。もし、「さんさん付け」の話題になったときは、自身の経験を伝えたいし、+もーもその場で話し合っ考えてい」(G先生)というように、学校の方針に従うが、「さんさん付け」呼称を導入するかどうかの機会が訪れることがあれば、積極的に関わりたいという姿勢もあることが明らかになった。

また、「[さんさん]呼び[をしたい]」。くだけるときとか、ふとした場面ではニックネームが出ると思う。逆に、「くん呼び」ができないと思う[これまで経験がなく慣れていないから]」(E先生)、「[「さん」と]呼ばれ慣

れていない子は戸惑うだろうから、その子たちと出会ってから決めたい。自身は小学校の頃、くん・さんで呼ばれていたの、それがスタンダードになっている」(H先生)など、自身の経験や慣れから「さんさん付け」呼称を選択したいという回答や、実際に児童と出会ってから、その距離感をはかって判断したいという回答もあった。

さらに、「さんさん」で呼びたい。その学校で推奨されてなくてもそう呼びたい。子も親も、先生とどこまで友達になれるか…みたいなのがあるし、「さんさん付け」することで、公共の場でのしゃべり方の意識が芽生えてくれたら、とも思う。大人が伝えていかないと。社会の場での線引き、対大人、対社会の線引き。なあなあではあかんし」(I先生)というように、学校で「さんさん付け」呼称が導入されていないとしても、とくに児童や保護者との距離感を作るために、「さんさん付け」呼称を用いたいという回答も見られた。

さらに1年生の担任をされた先生に、学校のルールとして「さんさん付け」呼称のことを児童にどう伝えたのかを尋ねると、「「お友達のことを〇〇さんって呼ぶと、後に続く言葉が優しくなるよ〜」「こんな素敵なことがあるよ〜」「もっとこうなるためにこうしていこうね〜」「1年生から6年生まで素敵な言葉を使って、素敵な学校にしようね〜」っていうように、学校のルールとして教えるんじゃないで、こうしていこうね〜」「こんな素敵なことがあるよ〜」っていう伝え方をしました」(H先生)という回答を得た。「学校のルールだから、「さん」で呼びましょう」や「「くん」で呼んではいけません」など、ルールとしての側面を伝えるのではなく、その呼称で呼ぶことが、どんな効果をもたらすのかに言及し、児童に伝えているということであった。

5. 「さんさん付け」呼称導入校への教員の語りの小括

本インタビュー調査を通して、「さんさん付け」呼称が導入されたことで、小学校の教員が感じている変化や効果、実感されていることなどを明らかにすることができた。以前から「さんさん付け」で児童を呼んでいた経験のある教員は、抵抗感なく、肯定的な受け止めの姿勢であったが、「さんさん付け」呼称に否定的な考えを持っていた教員も、取り組みを通して良い変化や効果を感じている。

これは、この数年で「さんさん付け」呼称が広がりを見せている一つの理由ではないかとも考えることができる。「さんさん付け」呼称を肯定的にとらえている教員が転勤になったり、「さんさん付け」呼称の導入を先導された管理職の教員が、次の赴任先で導入を検討するなど、自身の経験や体験を語ることで、先生が広がることで、「さんさん付け」呼称も次第に広がりを見せるようになったのではないかと考える。

以下、本インタビュー調査で得ることができた回答を用いて、「さんさん付け」呼称を考察すると、5点の示唆が可能であると考えられる。まず1点目は、「さんさん付け」呼称を用いることで、呼び捨てでの呼称を回避できるだけでなく、本人が望まないニックネームなどの呼び方で呼ばれることの回避にも繋がるという点である。G先生は、「「さんさん付け」の取り組みをしていないと、色んなあだ名が飛び交うので、いらんところで揉めなくなった」と「さんさん付け」の効果を実感されており、呼ばれたくない呼称で呼ばれ、児童が嫌な思いをすることがなくなるという可能性を示すことができる。2点目は、「さんさん付け」呼称は、教員が、意図的に児童との距離感を作るために用いられることがあるという点である。授業を公式な場として意識づけるだけでなく、大人との接し方、社会の場でのあり方を意識づけることで、公共の場でのふるまい方を身につけるきっかけになる可能性を指摘することができる。3点目は「さんさん付け」呼称に限らず、呼称とは「慣れ」によって、意識づけられていくものであるということである。これまでに「さんさん付け」呼称を経験したことがなく、否定的な考えであった教員も、次第に受け入れ、順応されている点や、「さんさん付け」呼称以外で呼んだことがないため、「くん」で呼ぶことに違和感があるという回答があることから、その呼称をどうとらえているかに関わらず、使い続けることで、定着していくことがわかる。

4点目は、「さんさん付け」呼称は、「第三者の目」に配慮された取り組みであるということである。教員が、児童との親密さに応じて呼称を変化させるなど、たとえ、教員と児童の二者間でも、呼称により当事者同士がどのような関係性にあるのか、第三者は感じ取ることが可能である。「うちの子は「名字+さん」、あの子は「〇〇ちゃん」ってのを気にする親もいるから…」(E先生)という回答があったように、第三者である児童にとっても、保護者にとっても、教員がみんなに平等に接しているわけではないのかもしれない、という不安感を与えることは、教員は避けるべきであると考えられる。今永ら(2007)は、「教師が便宜的に何気なく使い分けたのかもしれない呼び方を、児童は敏感に感じ取っている」、また「児童との関係性を肯定的に保つような対称詞を選択する配

慮が求められる」と述べており、呼称ひとつで児童との関係性に影響を及ぼす点が指摘されていることから、「さんさん付け」呼称の導入で、児童呼称を統一することの意義を確認することができる。

5点目は、「さんさん付け」呼称の導入は、児童の人間関係の構築に寄与したり、言葉遣いに変化をもたらすだけではなく、教員にも意識の変化をもたらすという点である。「男女分け隔てなく、ってことを呼び方通して再認識できたなあ。前は、好きな色とか聞かれた時、ピンクもいいなあと思ってても、男やから「青」って言うてることがあった。けど、ええやん、ピンク好きやで、ってサラッと言えるようになった」(C先生)のように、呼称を通してジェンダーの意識に変化があったという回答があることから、これまで使っていた呼称を再度見つめ直すことで、教員が児童に接する際、男女の固定観念をなくして児童ひとりひとりと向き合うことができるのではないかと考えられる。

IV. 結論

本研究では、京都市立小学校における「さんさん付け」呼称の導入実態を明らかにした。調査の結果、京都市立小学校全166校のうち、回答があった98校の70.4%にあたる、69校の学校で、部分的もしくは学校全体で「さんさん付け」呼称が導入されていることが明らかになった。「さんさん付け」呼称について、後に続く言葉遣いが優しくなる、ひとりひとりを同じように大切にすることができる、など、人権の視点から導入されるケースや、学校で扱う名簿が男女別から男女混合名簿に移行された時期に、男女平等の考えのもとに導入されるケースがあったことが明らかになっているが、他にも授業中を公式な場面として位置づけるという意図をもって導入されている学校があることも明らかになった。また、「さんさん付け」呼称を導入することで、呼び捨てや望まないニックネームで呼ばれることを回避できるという効果が見られるだけでなく、「男子はくん」、「女子はさん」という既存の枠組みをなくすことで、教員にとってジェンダー意識を変化させるきっかけになるということも示唆された。

引用・参考文献

- 中條修・滝浪常雄 1989 呼称に見られる対人関係の認識 静岡大学教育学部研究報告 人文・社会科学篇第40号 pp. 1-16
- 今永希未・田中洋子・高木秀明 2007 教師の用いる対称詞が児童に与える影響：児童は教師に、何と呼ばれたいと思っているのか 横浜国立大学教育人間科学部紀要第1号 pp. 85-96
- 小山昂志 2014 学級生活における「さん」付け呼称の受け止め方と使用に関する研究：A県B市立C小学校の学級への関わりを通して 学校教育研究第29号 pp. 177-185
- 三島浩路 2003 学級内における児童の呼ばれ方と児童相互の関係に関する研究 教育心理学研究第51号 第2巻 pp. 121-129
- 尾崎喜光 1998 生徒たちはどう呼ばれたいと思っているか (特集 人の呼び方) 日本語学 第17号 第9巻 pp. 37-40
- 榊原禎宏 叱るときこそ丁寧に - 教師の子ども呼称における賭け - 京都教育大学教育実践研究紀要 第12号 pp. 225-229
- 鈴木孝夫 1973 ことばと文化 岩波新書
- 高橋 美奈子 2009 沖縄県の学校場面における教師の呼称 琉球大学教育学部紀要第75号 pp. 195-205